更に鰻田の今ヶ税務署の地点にも船着場があり、雨傘を広げ、柄の部分を土中に刺した様な茶店があり、旅人の憩いの場所であったという。

五所明神の入江は水が美しく、夏になると子供達の泳ぎ場であり、色を真黒にしたカッパ連中が、水シブキをあげていたそうだ。そして東小学校横の桜並木の土堤から、網を打っていた時代もあったとのこと。此の様な古老の話を聞いて見ると、景色も変り地名もなくなり、静かであった塩浜のあたりも、一時は戦いの場となり、今は好ましくもない騒音と公害の渦中にひしめいている。静かであった昔が恋しいと思う。

（おわり）

踏査記録

椿山に登るの記

昭和四十六年一月三日　日曜
参加者＝高木、清田、五十川(雨)、森矢、加藤、川辺、小野(英)、市野瀬、羽柴、
(会員外)五十川金作氏、陰西静夫氏
地元　岡川正氏

谷口から軽トラックに乗って風戸山の樫谷まで。岡川文三郎氏の家に弁当など置き、軽装して山道を登る。杉の造林、椿林などの中を通り海抜四〇〇米位と思われるあたり、昔の横道に出る。右は尺間の長堀、左は本匠村に通ずる山道である。風もなく、珍らしく暖かい日である。

左手高く椿山が仰がれるころ、山道は山の鞍部にかかる。右手は尺間の奥、左手は風戸山竹原部落の上にあり、共有林らしい杉と松の林がずっと椿山の腰をめぐっている。本匠村笠掛の共有林だという。

椿山の腰にとりつくころ横道はとだえ勝につづく。目ざすその山頂はすぐ右上に見えるのだが、登山道は見つからない。青山から参加の陰西氏が先導で、細々とつづく横道を上手に一行を導いてくれる。

とうとう椿山の西側にまわって横道を辿って、やっと高木会長が往年登ったという、お地蔵さんの前に達する。つまり椿山の北西にまわったわけで、あたりは凡て二三年前伐採、小さな杉が植え込まれていて、見通しもよく歩くのも楽。皆元気を出して登る。

はるか彼方の山頂には後れて来ていた、加藤、市野瀬氏らが既に登りついている。地元岡川氏によって本来の登山道を登ったからである。

尾根は灌木が岩角にからみ、僅かに道がつづいている。

自然と足が早くなる。

全員六百五十八、八米の頂上に揃ったのは十一時。まことにすばらしい。冬であるのに殆んど風もなく空は晴れわたり、眼下に番匠川が白く光り、梅牟礼が低く小さく見え、その向うに佐伯市街、そして佐伯湾が見える。

東には彦岳と尺間山が殆んど重なるように望まれ、北にははるかに佩楯山、八戸(やと)の胡麻柄山が高く、それから西にかけて傾山、祖母の連山、その手前に六百米クラスの冠岳、米花山、場照山そして南に元越山と、グルリと三百六十度、山又山の大饗宴と言えよう。

何枚かの写真をとったり、持参の蜜柑をわけ合ったり、そんな和気あいあい、時のたつのも忘れて指顧や談笑がつづく。

椿山を満喫したといった満足感、よろこびにひたりながら岡川氏に導かれて下山にかかる。あちこちに椿の自生樹が多い。山の名のよって生まれた椿林の中を降って、横道に出、かなり疲れた足を急がせて下った。

岡川家に帰りついたが、緒方氏が行っているというので、寺屋敷の古塔を見にゆく。五輪塔が十数基、寺跡と思われる広場、なるほど古き時代に八十何戸も聚落があったと伝えられていることの一つの裏付けとしている。

椿山連峯を北に屏風のように、そして南に向ってゆるやかな傾斜をもつ高燥の地椎谷、気がついて見るとあちこちに菜の花が咲き、蜜柑畑が多い。冬も殆んど霜がないという温暖の地である。さればこそ山村過疎の時代であるのに、不便なこの三百六十米の高所に今も数軒の農家が、それぞれ十棟前後の建物をもった家が、裕かな生活をつづけているのである。

私達は岡川家の御厚意によって おもてなしをうけながら昼食の弁当を開いた。昔の話がいろいろ聞かされる。高木会長が本誌の最初に書いてある通り、昔の人達の山道による歩く交通というものを、今日はこの身をもって体験し、この足で踏んで歩いた。話はつきなかったが、私共は先を急ぐ故に御厚遇を謝して、竹原を経て、白谷に下った。

下り道は案外遠く疲れた足がいたい。然し皆てんでにいろいろおしゃべりをしながら歩く。

白谷の一番奥、一軒屋まで下ったら、殆んど平地。庭先から小犬がしきりとほえたてる。

今日ぜひ観たいと思っていた地獄谷は谷川を渡った向う。今降って来た竹原の一帯の窪地から流れる谷水が何千万年のいとなみで石灰岩を深くとかしくぼめた すばらしい景観である。深さ(高さ)十数米、巾僅かに三、四米の水のとかし深めた渓谷が百米ほどつづいていた。冬だから幸い水は殆んどなく奥ふかくその奇勝をさぐることが出来た。

これと並んですぐ下手に鍾乳洞があり、谷の右崖道路の上に高くそびえる石灰岩の岩峯 その下に蝙蝠穴(こうもりあな)があるのだが、もう時間がない。歩いて約五分でバス停について、ちょっと待ってバスに乗った。元気な連中は車のおいてある谷口まで歩いた。

地獄谷、鍾乳洞、蝙蝠穴のある白谷には、改めて又出かけねばいけない。いや椿山にも又登りたい。ほんとによい一日であった。

（羽柴）